ネットワーキング・ラボ　vol.05　お知らせ

TARLと、「三宅島在住アトレウス家」や「東京事典」をつなぐ！

TARLの11講座で取り上げるアートプロジェクトに必要不可欠な「知」や「スキル」と
アートプロジェクトの現場をつなぐ回路作りを目的に、TARLリサーチャーが中心となって
毎月1回企画しているオープン・デイです。

ゲスト：長島確（一般社団法人ミクストメディア・プロダクト）、
小澤慶介（NPO法人アーツイニシアティヴトウキョウ［AIT/エイト］）
コーディネーター（TARL事務局）：橋本誠（アートプロデューサー）

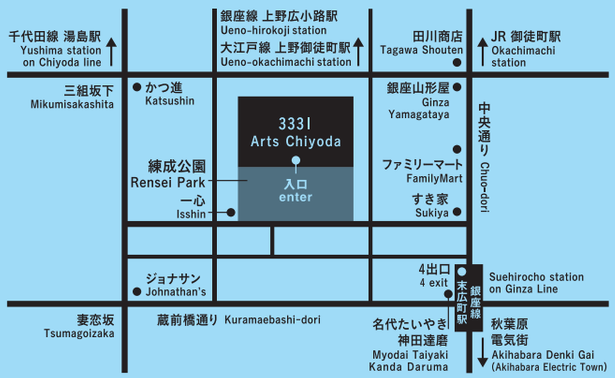
日時：平成24年11月4日（日）14:00〜15:30（13:30受付開始）、15:30〜16:30 交流会
会場：東京文化発信プロジェクトROOM302（東京都千代田区外神田6-11-14［3331 Arts Chiyoda 3F］）
料金：入場無料　※交流会参加費500円
定員：40名程度　※事前申し込みいただいた方を優先します

お申し込み方法：前日までにTARL公式サイトのウェブフォームまたはメール、Faxにて
「参加希望日」「代表者お名前」「人数」「当日ご連絡先（携帯電話など）」をお伝えください。

Tokyo Art Research Lab（TARL）とは

アートプロジェクトにまつわる問題や可能性をすくいあげ分析する、リサーチ型の人材育成プログラムです。アートプロジェクトを持続可能にするシステムの構築を目指します。東京の様々な人・まち・活動をアートで結ぶことで、東京の多様な魅力を地域・市民の参画により創造・発信することを目指す東京文化発信プロジェクト事業「東京アートポイント計画」の一環として実施しています。

主催：東京都、東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）
事務局：NPO法人アーツイニシアティヴトウキョウ［AIT/エイト］



メイン会場：
東京文化発信プロジェクトROOM302
〒101-0021 東京都千代田区外神田
6-11-14（3331 Arts Chiyoda 3F）
Tel : 080-3171-9724
Fax : 03-6740-1926
E-mail : info@tarl.jp

アクセス：
東京メトロ銀座線末広町駅より徒歩1分
東京メトロ千代田線湯島駅より徒歩3分
JR御徒町駅より徒歩7分
JR秋葉原駅より徒歩8分

http://tarl.jp

Researcher's Voice vol.1

発行日：10月4日　発行元：Tokyo Art Research Lab事務局（NPO法人アーツイニシアティヴトウキョウ［AIT/エイト］）監修：森司・坂本有理・佐藤李青（東京アートポイント計画）
編集：石井萌（TARLリサーチャー）、小澤慶介・橋本誠（TARL事務局）制作：石井萌・小澤恭子・三木遥・吉川晃司（TARLリサーチャー）デザイン：福岡秀隆　印刷：株式会社アイワード

東京文化発信プロジェクト

Researcher's voice

vol.1

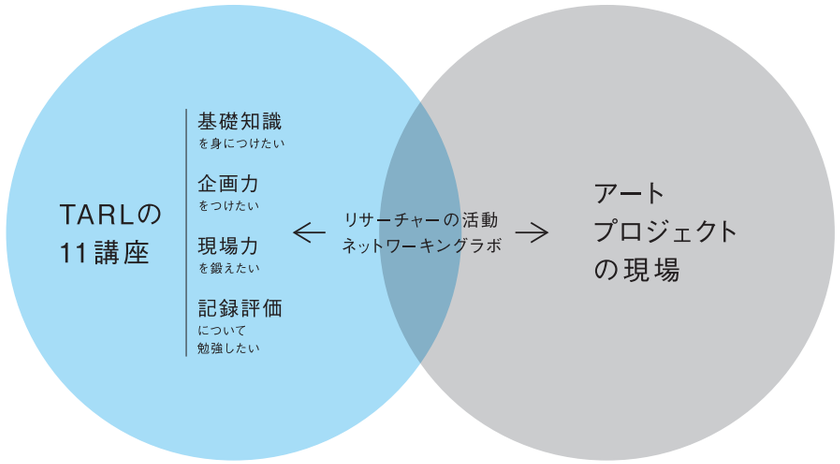
tarl
TOKYO ART RESEARCH LAB

2020年
オリンピック・
パラリンピックを
日本で！

東京アートポイント計画

tarl 相関図を読み解く！

アートプロジェクトについて詳しく知りたい、何かしら関わりたい、それには何からはじめればいいのか？
TARL（Tokyo Art Research Lab）は、アートの基礎知識、アートプロジェクトの企画立案、管理運営、アートと人をつなげる方法、記録を残す方法などについて実践的に学ぶ11講座（プログラム）を展開しています。
この「Researcher's Voice」では、各講座の運営を担当しながら、受講生と共に知見を学びそれをシェアするべく活動しているリサーチャー４人が中心となり、TARLやアートプロジェクトに関する様々な情報をお届けします。
ここではまず、TARLの意義やリサーチャーの役割について、リサーチャー４人の会話を通してお伝えしたいと思います。



※講座の内容については３-４ページをご参照ください。

TARLの本当の価値はここにある

石井　TARLの講座もだいぶ動き始めました。みなさんそれぞれいくつかの講座に関わってきた中で、どうですか？
三木　はじめは「どういう人が参加してくるんだろう？」と思っていました。アートプロジェクトのプロフェッショナルな人が集まってきて、いきなりディスカッションとか始まったらどうしようって心配していました。
石井　たしかに。でも実際は、もちろんアートプロジェクトに関わっている人もいるけれど、全くの初心者である社会人や学生もいて、いろんな背景の人が参加していますよね。
吉川　だからこそ違った視点の意見交換ができて、お互い面白いって思えるし、人とのつながりや新しい物事が生まれているように思う。
三木　私自身も授業を聞いていてなんだかアンテナが広がりました。今まで受け身だったのが、いろんな方向からプロジェクトを見られるようになった気がします。
小澤　それに、講師と受講者のつながりだけでなく、さらに進んで講座から現場への人の流れも生まれています。講師の一部は、実際のアートプロジェクトの現場を持っていますので、受講をきっかけに現場を手伝いはじめる人もいます。
石井　講座単体で存在しているというより、実は現場がそばにあるので、それも含めて体験できるチャンスがあるということかな。
吉川　それに加えて、TARLは受講者と現場だけでなく、現場と現場もつないでいると思います。ネットワーキング・ラボがその例で、普段は交わりのない複数のプロジェクトの関係者を招いて実情や課題を話したり意見交換したりする。こういった機会は意外に少ないんですよね。
三木　私もそれを聞いていて、意外と他のプロジェクトの情報を持ってないもんだなぁ・・って驚きました。
小澤　渦中にいると忙しさに怠けて、情報収集ができなくなってしまっているのだと思う。集中していると周りを見る余裕もなくなってしまいます。それに、プロジェクトの名前は知っていても交流するきっかけはないんじゃないかな。
三木　だからこそ、あのネットワーキング・ラボで生まれる現場同士の科学反応が面白いです。
吉川　まさに！ゲストの方の中には、「今まで他のプロジェクトの話を聞く機会がなかったから、とても勉強になりました」と話してくださる方もいて、改めて交流できる場の価値を見出しました。

リサーチャーのいる風景

石井　講座で、リサーチャーである自分の立場を説明をするのに、うまく伝えきれていない気がしています。多分、講師にも受講者にも。各担当講座の記録やレポートを作成してwebなどに公開はしていますが、他に私達リサーチャーの役割って何だと思いますか？
三木　一番は、講師側でも受講者側でもなく、客観的に講座を見られる、唯一の立場ってことじゃないかな。受講生よりも一歩うしろで俯瞰できるので、リサーチャーだからこそ気付けることがあると思います。具体的に講座の「ここがわかりやすい、わかりづらい」や、TARLの講座を複数担当するので、講座をまたいで受講生が疑問に思っていること、興味があることなどが相対的にわかってきます。
吉川　そうか、当事者だとなかなか気付けないところがありますよね。そう思ってもなかなかピックアップできない。
三木　開講することまでは夢中でも、つい振り返ることを忘れてしまい、次に活かすことができなくなってしまいます。
小澤　いいところも足りないところも見える。それを講師にも受講者にも率直に伝えていくことが私たちの大切な役割のひとつなのですね。
石井　それが講師や受講者に向けてだけでなく、TARLの場合は現場の人や、受講していないけれど興味のある方など、全方位に情報発信する立場と言えるのかも知れません。
吉川　講座の空気を温める役目もねっ！

TARLはまだまだ発信します！

石井　今後、TARLの中でどんなことがしたいですか？私は、今までアートプロジェクトを知らなかった人に「あなたの街でこんな面白いことやってるよ」って教えられるようになりたい。
吉川　僕はアートプロジェクト同士をつなげていけるような、ハブの役割を担いたい。
三木　新しいアートプロジェクト、団体が生まれる瞬間に立ち会ってみたいです。
小澤　ひとつのアートプロジェクトに関わる、様々な立場の人にインタビューしてみたいですね。
石井　これからもTARLに関わるみなさんが知りたいことを、実現できるように取り組んでいきましょう！

平成24年8月　東京文化発信プロジェクトROOM302にて収録

小澤恭子
TARL講座「アートプロジェクトの0123」一期生。アートの可能性を生きてる限り信じて騙され続けたい。前世「たこ」。

三木茜
美大に入るが別にアーティストになりたいとも思わず、でもアートが好きでなんとか関わってやろうと模索中。アートのほかに好きなのはお酒と旅行。

石井萌
5月に脱サラして現代アートの学校MADにも通ってます。アートの現場の仕組みに興味があります。チャラン・ボ・ランタン、ももクロちゃんが大好物です。

吉川晃司
芸術を学ぶ学部の中で建築を専攻していました。建物や家具をどう使うと楽しい空間が生まれるか、アートプロジェクトの中で楽しい空間をどう活用できるか興味があります。

5月から走り始めた今期のTARL。
こちらのコーナーでは、夏までにひと区切りを迎えた３講座について、担当リサーチャーよりご報告いたします。
また、今後の情報もまとめてご紹介。「乗り遅れた…」というあなた、まだ間に合います!

実践！プロジェクトデザイン

「やりたいこと」を実現するプロジェクトとは、どのような構造デザインを備えているのでしょうか？全６回にわたって展開した本シリーズでは、コーディネーターの林千晶さんほか、毎回エネルギッシュな女性プロジェクトマネージャーがゲストとして登場。それぞれの現場で意識しているポイントを紹介してくださいました。また、ワークショップ形式でチームごとにプロジェクトを進行し、そのプロセスからも実践的に学びました。

チームビルディングに始まり、ブレインストーミングからアイデアを収束し、さらに目標や指針を掘り下げ、プロジェクトの方向性をチームで共有します。後半に入ると“MVP（Minimum Viable Product）”、つまり「アイデアの価値を伝えられる最小限のプロトタイプ」をつくってユーザーテストを行い、そのフィードバックから最後のプレゼンテーションにまで持ってくるのです。

いったい何のためにそのステップを踏み、自分たちがどこに向かっているのかを常に意識しながらプロジェクトを育てていくと、「本当にこれでいいのか？」と自問することもあるかもしれません。チームには講師陣からの多角的なアドバイスや鋭いツッコミもあり、ノウハウを知識として取り入れていくだけでなく、実践の中から自分たちで気づき身に付けていくことを大切にしていました。

受講者の多くは会社員やクリエイティブな仕事をしている方々。自発的にチームに貢献し、お互いにモチベーションを高め合っているように見えました。各チームの目指していることの中に、「共有」や「人と人とのつながり」といったキーワードが目立ったのも、一人よりも誰かと何かアクションを起こすことに価値を感じている人が多かったからかもしれません。

とにかく次に進む、そのスピード感もこのシリーズの特徴だったと言えます。「より良いものを作る」、そして「よりアイデアの価値を伝える」ため、出来る限り早い段階での検証と改善のループの回転数を上げること。最後のプレゼンテーションは本当にクオリティが高かったです。

林さんは、「本当に実現するプロジェクトのMVPを作ってほしい、そしてここで出会った人とのつながりがずっと続くと嬉しいです」と語っていましたが、初めて会った人と6週間でプロジェクトの第一歩が踏み出せたことは、個人個人にとって大きな前進になったのではないかと思います。このシリーズで学んで、実感したことは、きっとこれからあらゆる局面で向き合うときに思い出されることでしょう。（三木）

期間：2012年6月27日～8月1日　水曜　19:30～21:30　全6回
コーディネーター：林千晶（米国NPOクリエイティブ・コモンズ　文化担当）
ゲスト：遠藤眞理子、栗栖良依、槌屋詩野（Hub Tokyo Co-Founder CEO）、片口美保子（Hub Tokyo Co-Founder COO）、渡辺ゆうか（FabLabKamakura, LLC）、今田素子（株式会社インフォバーン 代表取締役 CEO、株式会社メディアジーン 代表取締役 CEO）

P+ARCHIVE：リアルARTプロジェクト・アーカイビング実践（ベーシックコース）

キックオフレクチャーには日比野克彦さんにご登壇いただき、現在取り組んでいる「種は船プロジェクト」のこれまでの経緯と現状についてお話を聞くことができました。作品ではなく、「ことを起こすこと」の記録について、苦労話を交えつつでしたが、反面、本当に楽しそうに話される様子が印象的でした。

他４回の各レクチャーについても毎回違う講師を招き、ワーク・ディスカッションを取り入れながら「アーカイブとは？」について体系的に学びました。記録行為の歴史や、手順・手法やそのメリットから公開時の法律に及ぶまで、いろんな切り口でアーカイブすることにアプローチ。毎回の講座レポート作成も、受講者自身が交代で担当しました。

後半はいよいよ実践編ということで、日比野さんの「種は船プロジェクト」自体のアーカイブに取りかかります! 実際の現場で携わる作業は、知識として学んだこととはまた違う刺激として受講生の体験となるのだろうなと、個人的にも非常に興味があります。ちなみに5月19日に京都・舞鶴を出港した自走式の船「TANeFUNe」号は8月6日、水と土の芸術祭開催地でもある新潟港へ無事到着（本体は12月24日まで朱鷺メッセ横に展示されています）。報告会もこれから各地で行われるようで、併せて楽しみですね。（石井）

期間：2012年5月30日～7月11日　水曜　19:00～21:00　全5回
コーディネーター：NPO法人アート＆ソサイエティ研究センター
ゲスト：日比野克彦（アーティスト）、筒井弥生（アート・ドキュメンテーション学会会員）、齋藤柳子（レコード・マネジメント コンサルタント、学習院大学大学院人文科学研究科 アーカイブズ学専攻博士後期課程）、柴田葵（桜美林大学非常勤講師）、松永しのぶ（国立国会図書館総務部）

日本型アートプロジェクトの歴史と現在Ⅱ

「アートプロジェクトとは何か？」。2010年から始まったこの講座では、コーディネーターに熊倉純子さんを迎え、アートプロジェクトは一体何をもってそう呼ばれるのか、を定義・言語化することを試みています。

過去２年間でまとめた『日本型アートプロジェクトの歴史と現在 1990−2010』（TARL成果物のウェブページよりダウンロードできます）をベースに始まった今年度。第1期は、アートプロジェクトの起こりからその変遷、社会との関わり、アーティストの振るまいについてのレクチャーを中心に、アートプロジェクトの言語化に取り組みました。各回２時間半というボリュームでしたが、豊富なトピックスに、毎回時間があっという間。学生、大学教授、アートファンと幅広い層の受講者が、それぞれの立場からアートプロジェクトの定義について考えました。

目的は言語化ではありますが、例えば一口に「トリエンナーレ」と言っても、各プロジェクトの背景や、どんな風に地域と関わり、どんな影響をもたらしているのか、それ自体に個性があるところが本当に興味深かったです。

12月に開講する第２期は、3.11以降の取り組みに焦点を当てます。実際に現地でプロジェクトを行っているゲストもお招きするので、リアルなお話しを聴くことができるでしょう。（石井）

期間：2012年7月13日～7月27日　金曜　19:00～21:30　全3回
コーディネーター：熊倉純子（東京藝術大学音楽環境創造科教授）

現在進行中!

- 構造茶話会ープロジェクト構造論
- アートプロジェクトの0123
- 「評価」のためのリサーチの設計と実践
- 「組織」から考えるアートプロジェクトの可能性

募集・準備中!

- 渋谷アートファクトリー計画 DIWO Lab.
  10月31日（水）、11月22日（木）20:00～22:00
  ゲスト：クワクボリョウタ、Noiz architects
- Creators and Law
  11月10日（土）、2013年1月26日（土）
  ゲスト：武田俊、福嶋麻衣子ほか追加予定
- ネットワーキング・ラボ
  11月4日（日）14:00～16:30
  ゲスト：長島確（一般社団法人ミクストメディア・プロダクト）、小澤慶介（NPO法人アーツイニシアティヴトウキョウ［AIT/エイト］）
- アート社会論Ⅱ　冬期開講予定
  コーディネーター：港千尋

その他講座状況は
随時更新いたします!　http://tarl.jp

ネットワーキング・ラボ　お知らせ

ネットワーキング・ラボ　Vol.07, 08

TARLの11講座で取り上げるアートプロジェクトに必要不可欠な「知」や「スキル」とアートプロジェクトの現場をつなぐ回路作りを目的に、TARLリサーチャーが中心となって毎月1回オープン・デイを開催しています。

コーディネーター（TARL事務局）：
小澤慶介（NPO法人アーツイニシアティヴトウキョウ［AIT/エイト］）、
橋本誠（アートプロデューサー）、TARLリサーチャー

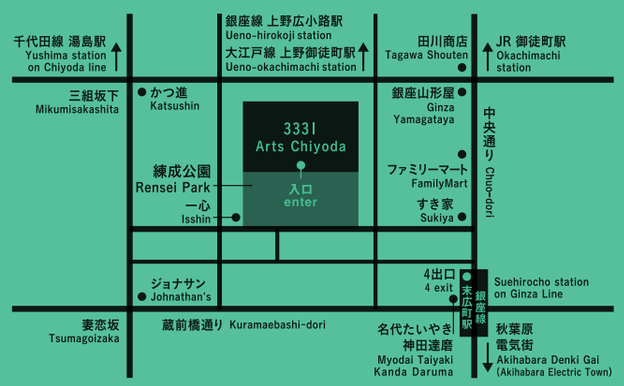
日程：平成25年1月13日（日）、2月3日（日）
会場：東京文化発信プロジェクトROOM302（東京都千代田区外神田6-11-14［3331 Arts Chiyoda 3F］）

※詳しくはTRALウェブサイトにてご案内します。

Tokyo Art Research Lab（TARL）とは

アートプロジェクトにまつわる問題や可能性をすくいあげ分析する、リサーチ型の人材育成プログラムです。アートプロジェクトを持続可能にするシステムの構築を目指します。東京の様々な人・まち・活動をアートで結ぶことで、東京の多様な魅力を地域・市民の参画により創造・発信することを目指す東京文化発信プロジェクト事業「東京アートポイント計画」の一環として実施しています。

主催：東京都、東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）
事務局：NPO法人アーツイニシアティヴトウキョウ［AIT/エイト］



メイン会場：
東京文化発信プロジェクトROOM302
〒101-0021 東京都千代田区外神田
6-11-14（3331 Arts Chiyoda 3F）
Tel : 080-3171-9724
Fax : 03-6740-1926
E-mail : info@tarl.jp

アクセス：
東京メトロ銀座線末広町駅より徒歩1分
東京メトロ千代田線湯島駅より徒歩3分
JR御徒町駅より徒歩7分
JR秋葉原駅より徒歩8分

http://tarl.jp

Researcher's Voice vol.2

発行日：12月2日　発行元：Tokyo Art Research Lab［TARL］事務局（NPO法人アーツイニシアティヴトウキョウ［AIT/エイト］）監修：森司・坂本有理・佐藤李青（東京アートポイント計画）
編集：三木薫（TARLリサーチャー）、小澤慶介・橋本誠（TARL事務局）　制作：石井萌・小澤恭子・三木薫・吉川晃司（TARLリサーチャー）　デザイン：福岡秦隆　印刷：株式会社アイワード

東京文化発信プロジェクト

Researcher's voice

vol.2

tarl
TOKYO ART RESEARCH LAB

2020年
オリンピック・
パラリンピックを
日本で！

東京アートポイント計画

tarl Tokyo Art Research Labとは…？

はじめに

アートプロジェクトについて詳しく知りたい、何かしら関わりたい、それには何からはじめればいいのか？
TARL（Tokyo Art Research Lab）は、アートの基礎知識、アートプロジェクトの企画立案、管理運営、アートと人をつなげる方法、記録を残す方法などについて実践的に学ぶ11講座（プログラム）を展開しています。
この「Researcher's Voice」では、各講座の運営を担当しながら、受講生と共に知見を学びそれをシェアするべく活動しているリサーチャー４人が中心となり、TARLやアートプロジェクトに関する様々な情報をお届けします。

TARLで展開する11の講座

テーマ	講座名称	受講形式	実施状況
基礎体力をつける	アートプロジェクトの0123	連続	開講中
	日本型アートプロジェクトの歴史と現在Ⅱ	連続	12/12, 19, 26開催
	アート社会論Ⅱ	公開	12, 1, 2月開催
企画力をつける	渋谷アートファクトリー計画 DIWO Lab. Do It With Others！ 新世代ものづくり実験シリーズ	公開	12/12開催
	実践！プロジェクトデザイン	実践	終了
	構造茶話会ープロジェクト構造論	実践	開講中
現場力を鍛える	「組織」から考えるアートプロジェクトの可能性	連続（一部公開）	開講中
	Creators and Law Creative Projectのためのリーガル・デザイン	公開	1/26開催
記録や評価について学ぶ	P+ARCHIVE リアルARTプロジェクト・アーカイビング実践	実践	開講中
	「評価」のためのリサーチの設計と実践	実践（一部公開）	開講中
「知」と「スキル」をネットワークする	ネットワーキング・ラボ	公開	1/13開催

※講座により、受講スタイルや申し込み方法が異なります。

TARLでは複数の受講形式で講座を開講しています。
これまでのTARLで得られた成果をシェアする目的で開講されているものから、受講生と共に新たな課題にアプローチするもの、現場でのプロジェクトを中心に展開するものまで、ご興味、ご都合に合わせてご参加ください。

［公開講座］ 部分的な受講が可能であったり、参加費が無料であったりと、気軽に参加できるプログラム。
［連続ゼミ］ シリーズ全回への参加を前提として、一定の期間・回数をかけてコーディネーターらとともにテーマを掘り下げていくプログラム。一部、部分的な受講が可能なものもあります。
［実践ゼミ］ シリーズ全回への参加を前提として、テーマに沿ったリサーチやワークショップなどを行うプログラム。

TARLリサーチャー（左から）小澤恭子、三木茜、石井萌、吉川晃司

講座ごとにリサーチャーや運営スタッフによるレポートをTARLのオフィシャルWEBサイトにて公開しております。
惜しくも参加できなかった講座については、是非そちらをチェックしてみてください！また、リサーチャーやプログラムマネージャーがアートプロジェクトに関する情報を発信するWEB版Researcher's Voiceも随時更新しております。

→ http://tarl.jp

tarl 最新レポート

TARLでまさに進行中の２つの講座の最新レポートをお届けいたします！

「組織」から考える アートプロジェクトの可能性

アートプロジェクトを継続的な事業として成立させるために、「組織」という視点から方法や考え方を見出し、検討していく講座として始まりました。第１回目では美術作家でありながら様々なプロジェクトをつくり活動を続けられている藤浩志さんよりお話を伺いました。

多くの人と関わって数あるプロジェクトを経験されてきた藤さんの言葉は、難しくて固い重い標語は一切ありません。物事の価値は絶対ではないとし、各々の思いや関係性を組織として育んできたことを語ってくださり、ひとつひとつの言葉に受講生も頷きながら興味深く聞き入っていました。そんな話の中でキーワードのひとつとして上がったのが「不在」。当事者がいなくなってもプロジェクトが継続していく仕組みを次の第2回目の講座で考えました。

キーパーソンが「不在」となったとき、組織を継続するのに必要な人の役割とはなんでしょうか？ 受講生は自分のプロジェクト（仕事）に重ね合わせて考え、答えを出しお互い話し合い課題を共有。自分の今いる組織において、それぞれの人の役割を客観的にリアルに感じ取る講座となりました。

また次回からゲストをお招きし、異なる角度からアートプロジェクトにおける「組織」を紐解く講義が続きます。（小澤）

期間：2012年9月～2013年2月　各月1回　19:00～21:00　全6回
コーディネーター：帆足亜紀（アートコーディネーター）
ゲスト：藤浩志（美術作家、十和田市現代美術館副館長）、森真理子（プロデューサー／一般社団法人torindo代表理事／まいづるRBディレクター）、花井裕一郎（まちとしょテラソ館長）ほか

アートプロジェクトの0123

アートプロジェクトに何かしら関わりたい、その一歩を踏み出すために必要なことを勉強する全19回の連続講座。コーディネーターの小川希さんよりアートの歴史・概念をジャンルごとに学び、さらに現在進行形で活躍するアーティストを迎えて作品や活動についての話を聞いて前半の授業が終了しました。そしていよいよ後半の実践編に入りました。

アートプロジェクトの担い手になるには文章を書く力も必要です。まずは美術ライターの白坂ゆりさんをゲスト講師として招き、文章の書き方、注意点、ポイントについての講義を受けた後、課外授業としてTERATOTERA祭り@西荻窪「西荻映像祭」を受講生のみなさんで観に行きました。

実際に開催している会場（店舗）の方の話から企画者側の話も伺い、レビューを書いて提出。白坂さんに丁寧に添削いただきました。なかなか人に自分の文章を見てもらう機会もないため、改めて注意深く言葉を見直し自分の癖や人に伝えるのに足りないところなど、今まで気づかずにいたことが洗い出され、みなさんの真剣に文章と向き合っている姿が何より印象的でした。また、同じものを観て書いたのに受講生それぞれ異なるレビューを一緒に読むことも、いい文章について違う角度から考えることができたようです。

文章力を身につける授業は美術評論家の福住廉さんへバトンタッチされてさらに続きます。これら授業が終わった後のみなさんの書く感想文のレベルアップが楽しみです。（小澤）

期間：2012年6月～2013年3月　隔週水曜　20:00～22:00　全19回
コーディネーター：小川希（一般社団法人TERATOTERA チーフディレクター、Art Center Ongoing 代表）
後期ゲスト：福住廉（美術評論家）、山出淳也（BEPPU PROJECT代表）、藪前知子（東京都現代美術館学芸員）、住友文彦（アートディレクター）ほか

CREATIVE PROJECT LEGAL DESIGN

アートプロジェクトを運営する際に直面する法律の問題を分かりやすく解説。ゲストの事例紹介も参考に「ツール」としての法律を知ることで、問題を回避するだけではなくプロジェクトの活動の幅を拡げることを狙った本シリーズ。その狙いや手応えについて、プログラム総合ディレクターの永井幸輔さん（Arts and Law）にお話をうかがいました。（吉川）

Creators and Law（以下C&L）の狙い

── C&Lで受講者に学んで欲しいことはどんなことですか？

まずは、法律的なトラブルに巻き込まれないために必要な知識を知ってもらうことです。またその上で、あくまで法律というのは「ツール」であることを知ってもらいたいですね。法律を知っておくことで今までとは違う新しいことができる。「法律って意外と使えるんだな」ということを知ってもらいたいです。

第1・2回：「リアルスペース」をデザインする

── ゲストの寺井さん、大山さんのお話はいかがでしたか

「リーガルウォール」のように街なかの壁にペインティングをする行為は、何の準備もなしに行うと民法上の所有権侵害や刑法上の器物損壊になる可能性があります。道路を占有して制作する場合には、道路交通法違反になってしまうかも知れません。そういう行為を寺井さんのように不動産の所有者や行政との話し合いによって場を整えることで、合法的に実現させることができるんですね。エンリコさんは寺井さんの企画した壁画プロジェクト「MADWALL」に参加されたアーティストの一人ですが、ストリートアートやグラフィティに対しても造詣が深い。グラフィティは違法になる場合もありますが、このプロジェクトでは法規制をうまくクリアした表現が実現できています。

── 寺井さんがお話をしていた時に、法律の面からカバーするだけではなく地域コミュニティとつながり、そちらへの理解も得ておくことが大事という話をされていたのが印象的でした。

法律の分野においても、コミュニケーションやコミュニティという考え方はすごく重要なんです。慣習的なルールのことを「ソフトロー」と呼んだりすることがありますが、寺井さんのプロジェクトはまさにこういったコミュニティにおける「ソフトロー」を重視して設計されていると思います。

── 講座では身近な事件や最近起きたネットでの騒動などに結びつけて話をしてくださるのでとても分かりやすいです。

やはり法律の話は分かりづらいので、身近な話を紹介できるように工夫しています。今後の講座でもテーマに応じて分かりやすい事例を紹介しながら、実践的な法律のお話をしようと考えています。

C&Lの今後の展開

── 第5・6回：「知的財産」をデザインする では、どのようなお話が聞けるのでしょうか？

例えば、音楽を流通させる手段は最近大きく変わってきています。ゲストの福嶋麻衣子さん（もふくちゃん、株式会社モエ・ジャパン）は経営者としてアイドルや音楽を取り扱っていますが、その中で商標権や著作権などととてもうまく付き合っているので、トークをとおして紹介して行けたらと考えています。

また、第1・2回でも出たコミュニティの話にもつながりますが、アイドルのようなファンコミュニティと知的財産との関係にも迫る予定です。先程の「ソフトロー」の観点でも、彼女は非常に実験的なことを行なっていると思います。

── 法律というのは一つの側面であってその他のコミュニティ、倫理の問題などとどう摺り合わせていくかが大事なんですね。

そうですね、それはこの講座全体を貫く一つのコンセプトになっています。第3回以降も、法律的側面と共に、法律以外の側面をどうやってコントロールするかという話は重要になってくるでしょうね。

（2012年10月30日スカイプにて収録）

期間：2012年9月～2013年1月　土曜　13:00～17:15
コーディネーター：Arts and Law
総合ディレクター：永井幸輔（弁護士／Arts and Law）
ゲスト：寺井元一（株式会社まちづクリエイティブ）、大山エンリコイサム（美術家）、武田俊（KAI-YOU, LLC. 代表）、福嶋麻衣子（もふくちゃん、株式会社モエ・ジャパン）ほか

アートプロジェクトを様々な面から読み解くTARL講座。
受講者に講座の印象や普段の活動について聞いてみました！（三木）

── TARLを受講したきっかけは？

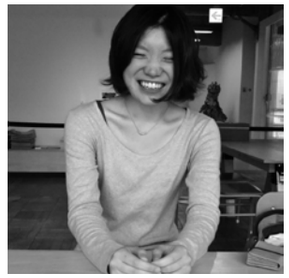
もともと美術教育やアートプロジェクトに関心があって、大学院では芸術支援領域を専攻しています。「日本型～」の熊倉さんのゼミに参加している内にTARLを知り、組織や評価の話に惹かれて受講しました。

── 講座の内容はどうでしたか？

毎回きっかけを与えてもらっている感じです。なかなか自分の周りだけだと知らないままなので。「評価～」第1回でrecip※1の活動を知ったのは衝撃でした。記録の重要性を実感しましたね。現在は講座記録の校正作業も手伝っていて、膨大な量の情報から必要な要素を引き出すトレーニングにもなっているんです。また、縁あって墨東まち見世編集塾※2にも関わるようにもなりました。まだまだ記録や評価が不確定の現場もあると思うし、だからこそ考えていく必要があると思います。「組織～」では改めて自分のこれまでの活動を客観的に考えられますし、コーディネーターの帆足さんやグループディスカッションの中で更に新しい意見が聞けてやる気が出ますね。

── 今後知りたいことや展望はありますか？

アートプロジェクトに対して第三者的な視点で批判・批評する立場に興味がありますね。あと、TARL講座で色々な人に会って、現場の情報を知りたいという飢えが更に…（笑）校正をやっていくと分かるのですが、まとめられた文章には無い部分が現場にいくと沢山知れますから。人との対話が好きなので、未編集の言葉も聞きたいなと思っています。



髙橋りほさん（大学院生）

［参加講座］
・日本型アートプロジェクトの歴史と現在Ⅱ
・「組織」から考えるアートプロジェクトの可能性
・「評価」のためのリサーチの設計と実践

※1 NPO法人地域文化に関する情報とプロジェクト［recip］
※2 墨東エリアを舞台にした「墨東まち見世」のドキュメント制作プロジェクト

宮崎晃吉さん（建築家・デザイナー）

［参加講座］
・Creators and Law
・ネットワーキング・ラボ

※3 HAGISO　http://hagiso.jp/
※4 文化イベントの企画・運営を行う一般社団法人［谷中のおかって］
※5 吉祥寺にある芸術複合施設［Art Center Ongoing］
※6 左頁参照

── TARLを受講したきっかけは？

ちょうど自分が興味を持っていた人がコーディネーターやゲストに何人かいたんです。僕個人の活動として、学生時代に友人とシェアハウス兼アトリエとして使っていた萩荘という木造アパートを現在リノベーションしているところで※3、今後はカフェやギャラリーなどを備えた最小文化複合施設として色々な人が集まれるようなスペースにしていきたくて。これから運営をしていくにあたり、SNSなどで興味のある活動に直接コンタクトをとっているのですが、色々な人の話を聞きたいなと思っていました。

── 講座の内容はどうでしたか？

ネットワーキング・ラボvol.1ゲストの谷中のおかって※4は同じ谷中エリアでの活動ということで参考になりましたし、vol.3のTERATOTERA代表の小川さんの運営するOngoing※5は自分のやろうとしていることのまさに理想ですね。アートプロジェクトを動かしている人たちのビジョンを聞けるのは良い機会だと思います。C&L※6の永井さんや寺井さんは実は以前お話を聞く機会があったのですが、プレゼンテーションとして聴くとまた違った印象でした。

── 今後知りたいことや展望はありますか？

建物だけ建てても、誰かが使ってくれないと意味がない。どういうスペースが地域やアーティストに求められているのかは気になりますね。場所づくりのプロセスから盛り上げていく方法もあると思うので、これからもっと色んな人も巻き込んで活動していければと思っています。

「音まち千住の縁」初日突撃レポート！

秋の訪れと共に、各地で次々と盛り上がるアートプロジェクト。現場をテーマにするTARLのリサーチャーも、取材にボランティアにと飛び回っています。そこで今回は、第２回ネットワーキング・ラボにも登場した「アートアクセスあだち『音まち千住の縁』」（以下、音まち）メイン会期初日のレポートをお届けします。（石井）

メイン会期初日10月27日（土）の午後1時。オープニングを飾る華やかなパレードが始まりました。先導するのは大友良英さん率いる管楽器、アコーディオン、バンジョーで編成された「チャンチキフライングホーンズ」。その後ろには、カーニバル系太鼓部隊、「BAQUEBA（バッキバ!）」が続きます。音まち活動拠点「音う風屋（おとうふや）」から北千住駅に向かって住宅街を練り歩き、駅構内を通り抜けて西口の商店街へ。突如現れた非日常の光景に驚きつつも、期待の混じった表情で一行を見つめる地域の方々が印象的でした。

1時間半に渡るパレードの終着地点は河川敷「虹の広場」。思い思いの楽器を手に集まった当日参加組も合流し、この日のメインイベント「フライングオーケストラ」がスタートしました。オーケストラと言っても、この演奏会に楽譜は存在しません。指揮者である大友さんの簡単なハンドサインを覚え、それに合わせて好きな音を鳴らすというユニークな構成でした。

雨雲に覆われていた朝の天気がうそのように晴れ、ちょうど良く風も吹いてきたところで凧揚げ部隊の登場です。ウィンドチャイムが結びつけられているもの、傾きに反応して音が鳴るもの、爆竹が取り付けられているもの…個性的な「音」をまとった凧が次々と空へ舞い上がります。颯爽と登場した遠藤一郎さんの連凧もそこへ加わり、頭上はいっそうカラフルに。絶好の気候の中、最後は地上と空の大合奏でフィナーレを迎えました。

続いて、民家を使った展示、八木良太さんの「（Another）Furniture Music -（別の）家具の音楽」、大巻伸嗣さんの「イドラ」を観て回りました。

八木さんの会場では、ひきだしを開けると千住で集めた“暮らしの音”が聴こえる「The Forest of Senjyu」や、鏡の前に腰掛けてヘッドフォンで散髪の音を聴く「Chair and Mirror」など、体感型の作品が多数展開。一つの家の中に居ながら、まちの様々なスポットを散策しているような感覚を味わえました。

大巻さんの「イドラ」は、直近10年間空き家になっていた古い日本家屋を使ったインスタレーション。スタッフが1ヶ月掛けて探し回ったこの家屋には、入り口からすぐの暗い部屋に黒い球体が設置されていました。外からは少し不気味に思えても、中に入ると不思議なほど居心地が良く、正に、自分自身の「イドラ＝偏見」と対峙するようなひとときでした。

2年目を迎えた音まちは、認知度も格段に上昇。大巻さんの担当としてプロジェクト運営に携わる東京藝大音楽学部音楽環境創造科のエレナさんは「準備のとき、まちの人から『今年も行くよ』と声を掛けてもらった」と、地域での音まちファン増加に手応えを感じているそうです。

また、今年度は区の80周年事業に組込まれたことによる規模拡大に伴い、アートディレクターやPR担当などプロフェッショナルな人員も整備。「プロジェクトごとに縦割りになってしまいがちなので、内部情報共有のために“かわら版”をつくりました」と話すのは、広報担当の東さん。とは言え「まちなかへの周知は足を使って顔を見せるのが一番。そこはまだまだがんばりたい」と、地域とのより密なコミュニケーションに向けても意気込みを語ってくれました。

この後も、毎週末ごとにワンデイプログラムで様々なアーティストのプログラムを実施。にぎやかに街をいろどりました。

アートアクセスあだち「音まち千住の縁」http://aaa-senju.com
メイン会期：2012年10月27日（土）～12月2日（日）
会場：足立区千住地域
主催：東京都、東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）、東京藝術大学音楽学部、特定非営利活動法人やるネ、足立区

のみにけーしょん！

小澤恭子

昔は人とのつきあいでお酒を飲むなんぞお断り。面倒で嫌いだった。お酒が飲めない訳ではない。むしろ好きだ。たわいもない話をして無駄に時間とお金を費やしているだけでしょ？これは案外的外れではない場面もある。積極的に参加しない。正しくはこれ。とにかく協調性がなくスナフキンと呼ばれていた所以も少なからずここにある。

ところがどこでどう狂ったのか？人生何が起こるかわからないとまで言ってしまえるほど、今の私を知る人は驚くはず。何しろほとんど飲みに参加しているからだ。「のみにけーしょん」、これはアートプロジェクトの必修項目なのである。はじめは知り合った仲間が新鮮で、面白かったから参加しただけだった。今でも単に楽しいからという理由だけでもある。ただそれ以上に大切なことが「のみにけーしょん」には潜んでいる。少し分析してみよう。

お金になるからとアートプロジェクトに関わる人がいたら奇跡的だ。そして一人で決して出来るものではなく、チームを組んで成り立っている。つまりは思いと人との信頼関係が大前提で築き上げられている。これが生まれる場所、それが「のみにけーしょん」なのである。

はじめから人付き合いが得意で、すぐに本音で打ち解けられる人なんて少ない。「のみにけーしょん」に参加したからと言って、もちろんすぐに距離が近くなるわけではないし、その場でなんでも話せということでもない。一緒に過ごす時間の中で、どこかお互いを知る空気が生まれるのだと思う。

はっきりと手にするもののないアートプロジェクトという山にはそんな空気が必要で、それがあるからアーティストも上ってこられるし、理解のない担当者との辛い峠も乗り越えられる。だからといって頻繁に「のみけーしょん」しなくても・・と言われてしまいそうだが、実現するかは別として、新しいアイディアがひょっこり生まれる未来への入口でもあるのだ。

アートプロジェクトにとって「のみにけーしょん」は何より大切な時間。そして私の好きな時間なのである。

Tokyo Art Research Lab（TARL）とは…

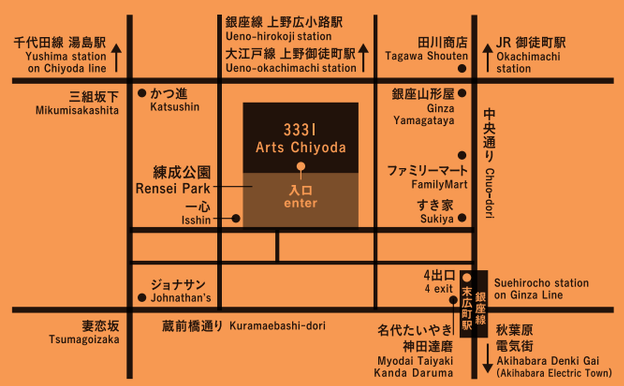
アートプロジェクトにまつわる問題や可能性をすくいあげ分析する、リサーチ型の人材育成プログラムです。アートプロジェクトを持続可能にするシステムの構築を目指します。東京の様々な人・まち・活動をアートで結ぶことで、東京の多様な魅力を地域・市民の参画により創造・発信することを目指す東京文化発信プロジェクト事業「東京アートポイント計画」の一環として実施しています。

主催：東京都、東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）
事務局：NPO法人アーツイニシアティヴトウキョウ［AIT/エイト］

TARLで展開する11の講座

テーマ	講座名称	受講形式	実施状況
基礎体力をつける	アートプロジェクトの0123	連続	開講中
	日本型アートプロジェクトの歴史と現在Ⅱ	連続	終了
	アート社会論Ⅱ	公開	2/15、20開催
企画力をつける	渋谷アートファクトリー計画 DIWO Lab. Do It With Others ! 新世代ものづくり実験シリーズ	公開	2/22開催
	実践！プロジェクトデザイン	実践	終了
	構造茶話会 プロジェクト構造論	実践	終了
現場力を鍛える	「組織」から考えるアートプロジェクトの可能性	連続（一部公開）	2/12開催
	Creators and Law Creative Projectのための リーガル・デザイン	公開	終了
記録や評価について学ぶ	P+ARCHIVE リアルARTプロジェクト・アーカイビング実践	実践	開講中
	「評価」のためのリサーチの設計と実践	実践	2/9開催
「知」と「スキル」をネットワークする	ネットワーキング・ラボ	公開	終了

※講座により、受講スタイルや申し込み方法が異なります。



メイン会場：
東京文化発信プロジェクトROOM302
〒101-0021 東京都千代田区外神田
6-11-14（3331 Arts Chiyoda 3F）
Tel : 080-3171-9724
Fax : 03-6740-1926
E-mail : info@tarl.jp

アクセス：
東京メトロ銀座線末広町駅より徒歩1分
東京メトロ千代田線湯島駅より徒歩3分
JR御徒町駅より徒歩7分
JR秋葉原駅より徒歩8分

http:// tarl.jp

Researcher's Voice vol.3

発行日：2013年2月7日　発行元：Tokyo Art Research Lab事務局（NPO法人アーツイニシアティヴトウキョウ［AIT/エイト］）　監修：森司・坂本有澄・佐藤李青（東京アートポイント計画）
編集：小澤恭子（TARLリサーチャー）、小澤恭介・橋本誠（TARL事務局）　編集補助：高村瑞世　制作：石井南・小澤恭子・三木直・吉川克司（TARLリサーチャー）　デザイン：福岡泰隆　印刷：株式会社アイワード

東京文化発信プロジェクト

Researcher's voice

vol.3

tarl
TOKYO ART RESEARCH LAB

2020年
オリンピック・
パラリンピックを
日本で！

東京アートポイント計画

tarl アートプロジェクトの現場から〜 01

岩井優 TERATOTERA 参加アーティスト × 脇屋佐起子 TERAKKO 対談

TARLで主に取り上げている「アートプロジェクト」なるものは、アーティストやキュレーター（ディレクター）だけではなく、多くの人が関わることで作品のあり方が変わります。どのようなプロセスを経て作品は生まれるのでしょうか。

JR中央線の高円寺〜国分寺を舞台にしたアートプロジェクト〈TERATOTERA〉では、TERAKKOと呼ばれるボランティアスタッフが企画立案から交渉、運営までを担っています。

昨年の9〜11月には「TERATOTERA祭り 2012」が開催され、高円寺〜吉祥寺間の各駅周辺で展示やイベントが企画されました。阿佐ヶ谷の市民プールで展示をしたのは岩井優さん。プール上で垂直に浮かぶようにスクリーンを張り、そこに映像作品を投影したインスタレーションで、すぐ脇を通る中央線の車窓から見る作品でした。

担当したTERAKKOの脇屋佐起子さんと岩井さんのお二人に、作品展示までのプロセスや裏話をうかがい、現場の様子を明らかにしたいと思います。（三木）

— 今回の展示はどのようにして企画されたのでしょうか？

（岩井さん＝I、脇屋さん＝W）

W：展示会場にプールを使うというのはTERAKKOの中から出てきた案です。背景には、電車の中から作品を見てもらうというコンセプトがありました。最近は電車の中で携帯をいじっていたりしがちで、車窓からの景色になかなか目を向けなくなっている事に感じていた違和感から案が出てきました。岩井さんにお声がけしたのは、私が過去に大きなインスタレーション作品を見たことがあり、プールという会場で展示できる作品も作れそうだと考えたからです。

I：7月に連絡をもらったときにはドイツに居たのですが、スケジュールと会場、あと企画タイトルも決まっていたんです。図面で見たときはピンとこなくて、実際に見るまで全く予想がつきませんでした。8月に下見に行って初めてその広さが分かりましたね。すぐに映像を撮影するための足場を立てて、9月半ばには撮影に入りました。

W：シーズンが終わるとプールがどんどん濁っていって水中でクリアに撮影する事が難しかったですね。撮影が済んだあと、藻で覆われて真緑になっていました。

I：天候にも悩まされましたし、いろいろな制約も重なって最初のプランからは随分変更がありました。スクリーンを作るだけだったらそんなに大変ではなかったと思いますが、それをプールに張るなんて現場の誰も経験がないですから。映像を裏から透かして投影するために農業用の不織布を使っていたのですが、雨や風で何度もちぎれてしまう。落ちてしまったスクリーンを引き上げるときプールの藻の匂いがして網を上げた漁師の気分でしたね（笑）。それをまた補修して張って、また次の日に来たら破れているという・・・台風も来るし。でもそのトライアンドエラーが結果的に良かったと思います。

W：振り返ってみると、毎日自然との知恵比べをしていたような気がしますね（笑）。そんな状況で現場のTERAKKOや手伝いに来てくれた人たちとアイデアを出し合いながらタイムリーに対応できた事は良かったです。服飾関係の仕事をしていた人が布を補強する方法を提案してくれたり、ドキュメントムービー制作に挑戦してくれた人もいました。

— 展示の最終日には上映会も開催されましたね。

W：中央線から見てもらう作品でしたが、走行中の電車からだとほんの3-4秒しか見られないんです。そこでプールを管理している杉並区にご協力いただいて、一晩だけ映像全編を鑑賞するための上映会を開催しました。台風で1日延期になってしまいましたがとても素晴らしいものになりました。鈴虫が鳴いていて、大きな月が出ていて、プールの上で羽衣のようにスクリーンが風になびいている。すぐ脇の中央線が走っていく音と、見ている人たちの静かな熱気みたいなものが一緒になって一つの美しい情景をつくりだしていました。

— 現場のモチベーションはどうでしたか？

W：モチベーションは本当に人それぞれですが、結構みんな熱いんですよ。人手が足りない時はTERAKKOの知り合いに声をかけたり、ウェブでもお手伝いを募集したりしました。あとSNSを使って作品の進行状況なども広報していたのですが、ツイッターで作品のことを知って、実際に見てくれた人のコメントが本当に励みになりました。リアクションがあったからこそ頑張れたと思います。

I：良い意味でゆるさもあったと思いますね。それは信頼関係から成り立っているんですけど、「この人の頼みなら引き受けよう」っていう関係。例えば、TERATOTERAで足りない部分があっても何とかなる。むしろそれがあるからこそ、誰かが頑張って、それがまた伝染していくんだと思います。失敗もあって当然というか許される雰囲気。何か失敗したときにそれを包んでいくには関わる人たちの弾力性が必要ですね。皆がある程度担保してくれている安心感があるのがTERATOTERAの良い所だと思います。

W：映像を投影したプロジェクターも、交渉上手なTERAKKOが協賛で借りて来てくれたものです。経験もスキルも足りない中で「やり遂げたい」熱意で成り立っていた部分は大きいです。“不足”がうまく機能してくれたのかもしれませんね。

I：映像を大きなサイズで投影したかったので、パワーのあるプロジェクターが確保できて本当に助かりました。中央線の高架下にも光が漏れて写っていたのも面白かった（笑）。

— 最初の構想から何か変化はありましたか？

I：もともと協働する事や「アートプロジェクト」を目的にしたのではありませんでしたが、結果的にプロジェクト化したのかな、と思います。時間も予算も限られた中で本当に人の力に助けられました。あの場で最大限作品に取り組む事が前提ですし、そこに集中できたのは良かったですね。

W：私はもう少しその地域性をくみ上げるような工夫もしたかったです。アートに関心のある人だけではなく、地域の方々をもっと巻き込みたかったのですが、今回はそこまで余裕がなかったですね。

I：例えば「地元の人と交流しながら、彼らにも作品に関わってもらう」というような、プロジェクトとしての目的がはっきりしていたらもっと長い時間が必要ですね。今回は興味を持って覗きに来てくれる人はいたので、そのきっかけを広げられるかどうかはこれからの活動次第。アートプロジェクトにフォーマットは無いですから、自分たちでやり方を探るしか無いと思います。TERATOTERAの今後には期待しているのでお互いに頑張りましょう!

TERATOTERA　http://teratotera.jp
主催：東京都、東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）、一般社団法人TERATOTERA

《What happened on the pool ?》
会期：2012年 9月22日〜9月30日
特別上映会：2012年 10月1日 19:00〜20:00
会場：杉並区 阿佐谷けやき公園プール

岩井優（いわい・まさる）
1975年京都生まれ。これまで清掃／ごみを作品制作に持ち込み、インスタレーション、映像、パフォーマンスなど多岐に渡る表現媒体を用いて、循環的な営みを問い直している。（http://masaruiwai.com）

脇屋佐起子（わきや・さきこ）
東京生まれ。会社員のかたわらTERAKKOとして活動。Tokyo Sourceライター、AIT BlogではMAD修了生へのインタビューも継続中。時にキュレーションも手掛ける。

いよいよ終盤を迎えたTARLの数々の講座。終了した講座と、
進行中の講座について最新レポートをリサーチャーよりお届けいたします！

日本型アートプロジェクトの歴史と現在Ⅱ
―定義の試み＆3.11以降の動き

7月と12月の2期・全6回に渡って行われた本講座。第1期は、2010年度の講座で作成した『日本型アートプロジェクトの歴史と現在 1990-2010』をベースに、改めて「日本型アートプロジェクトとは何か」の定義・言語化を試みました。第2期は「3.11以降のアートプロジェクトの変容」にスポットを当て、各回のゲストに、それぞれの視点から現地での活動を振り返っていただきました。

第2期初回のゲストは、東京アートポイント計画のプログラムオフィサーを務める佐藤李青さん。2011年7月に立ち上げた、宮城・福島・岩手対象の「東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業」についてのお話でした。被災地にアートプロジェクトを持ち込んだことで浮かび上がった、地域の「ネットワーク」という強みや、現地で感じた「被災地/被災者とは何か?」という物理的・心理的な「境界線」のお話はとても考えさせられました。“被災地支援”という少し漠然とした言葉が、県や地域ごとに細分化されることによって具体的にイメージできたのではないでしょうか。

第2回は、音楽家の大友良英さんによる「プロジェクトFUKUSHIMA!」の話。1万人以上を動員するまでの規模となったフェスティバルが実現するまでのプロセスや、日本中から集めた風呂敷を縫い合わせて巨大な風呂敷を制作する「福島大風呂敷」の裏話を、聞き手に寄り添いながら、かみ砕いた言葉で伝えてくださる姿が印象的でした。一方、切り離せない原発問題で、意図に反して推進派/反対派の二極で語られてしまうという話の際には、会場も緊張した空気に。今問題なのは、福島の内外で断絶されているこの状況だ、と大友さん。最後は「それを繋ぐことができるのは、外側に居る人だ」という力強い言葉で締めくくられました。

最終回のゲストは、アーティストのきむらとしろうじんじんさん。岩手県大槌町で、「ひょっこりひょうたん塾」の一環として行った「野点（のだて）」についての話でした。3.11当日は京都にいたため関東に住む人とも感覚が違っていて戸惑ったことや、プロジェクトの打診を受けてからの気持ちの葛藤を包み隠さず話して下さいました。大槌町民の「震災後の風景も大槌です」という言葉に背中を押された話や、器への絵付けで海を描く人が多く、青色の釉薬を使用する人が一番多かったという話も印象的でした。また、講座終盤には現地スタッフへのインタビュー映像も上映され、現地住民の貴重な声が届けられました。

第2期の内容は講座のタイトルどおり、震災後の「現在」を反映した内容でした。プロジェクトの経緯のみでなく、各地の状況についても知ることができ、毎回の2時間半が本当に濃厚なひとときでした。そして、全ての回に答えが無かったように、当然ながら「現在」はこの瞬間も続いています。この後、講座で語られた内容のドキュメント化を行い一区切りとなりますが、引き続き各プロジェクトの動向やその後を追って行きたいと思います。（石井）

期間：2012年7日～12月　水曜　19:00～21:30　全6回
コーディネーター：熊倉純子（東京藝術大学音楽環境創造科教授）

渋谷アートファクトリー計画
DIWO Lab.

渋谷の道玄坂を上りきったところにFabCafeという場所があります。ここは、おいしいコーヒーを飲みながら、レーザーカッターによるものづくりを体験できるカフェになっています。FabCafeから生み出された様々なプロダクトがカフェの空間を賑やかに彩っています。

ここで開催されているのが本プログラム。DIWOとはDo It With Others（他の人と一緒に作る）という意味で、DIY（Do It Yourself＝個人で作る）の次のフェーズを指しています。アーティスト・クリエーター・エンジニアがレーザーカッター・3Dモデラー・3Dスキャナなどの新しい使い方を実験するプロセスを参加者と共有することで、新しいFAB※のあり方を体感できる内容になっています。

ゲストにファッションブランドのTHEATRE PRODUCTSとファッション博士の水野大二郎さんをお招きした第6回では、服飾にFABの考え方を導入することで、作品のコンセプト、形態、流通、販売方式などが変わっていくことについて、議論が大変白熱しました。

DIWO Lab.では、実際にその場で作品制作をしてしまうこともあります。この回ではオリジナルのiPadアプリを使って参加者たちが線を描き、そのベクトルデータによって、レーザーカッターがシャツの意匠をその場で作り出していく様子を間近で見ることができました。参加者もゲストもみんな席を立ってレーザーカッターマシンを見守る光景にはデザイン・クリエーションの新時代を感じさせられました。（吉川）

※世界で広がっている「ものづくり革命」のムーブメント

期間：2012年7月～2013年2月　不定期　20:00～22:00　全8回
コーディネーター：川井敏昌（FabCafe LLP COO）、岩岡孝太郎（FabCafe LLP Fab Director）
コラボレーター：山元史朗（co-lab 工房ファシリテーター）、梅澤陽明（FabLab Shibuya）

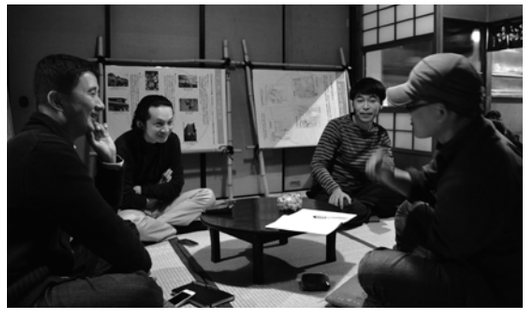
構造茶話会 ―プロジェクト構造論

谷中にある旧平櫛田中邸を舞台に、コーディネーターとレギュラーの4人が、同じ型にはまらないアートプロジェクトについて、全体を〈構造〉という言葉で様々な方向から考えて語り合ってきました。

例えば第2回では建築の構造から話がスタートし、この会で考えている〈構造〉とどんなつながりがあるかについて「建築の見えるもの、空間とかのバランスは作品をつくっていくのと似ている」など意見が飛び交い、ついには「建築の構造を知らない人は、普段の生活経験では気にもしないことだけど、でも構造があって成り立っていることをどうやって見ていくか。それが茶話会で考えようとしていることだ」とつながりました。その他、地方のアートプロジェクトの話やアートプロジェクトにおける政治力など、様々な方向に話は広がり、毎回自由な発想で〈構造〉というキーワードを掘り下げていきます。定義づけることが目的ではないので、着地点はいつも異なります。分かりやすく手にとれるはっきりしたものが無いけれど、話の興味は果てしなく、どこへでも接続されていく様子は、まさに〈構造〉の面白さと難しさを参加者に伝えています。

この会のもう一つの楽しみは、季節を感じる趣のある部屋（会場）と、おやつや飲み物。食べることを通じて人々が共有する場所・時間の重要さを考えています。年末には構造鍋会を開催。鍋を囲んでみんなで食べたり飲んだりするうちに人の距離がぐっと縮まって、ひとりひとりが今までの茶話会の様子を振り返り、感想や意見の数々をお互い口にしていました。（小澤）

期間：2012年7月～2013年1月　各月1回　18:00～21:00　全7回
コーディネーター：長島確（ドラマトゥルク、翻訳家）、佐藤慎也（日本大学准教授、建築家）
レギュラー：熊谷保宏（日本大学教授、応用演劇）、野村政之（ドラマトゥルク、制作）



拠点訪問！ シャトー 2F（ニーエフ）から生まれる出来事

アートプロジェクトにとってはかかせない存在になりつつある、プロジェクトに関わる様々な人たちが出入りする「拠点」。東京アートポイント計画の一環として展開している〈小金井アートフル・アクション！〉の活動の場でもある「小金井アートスポット シャトー2F」に伺い、東京で行われるアートプロジェクトにおける拠点の可能性を探ってきました！（吉川）

シャトー2Fはシャトー小金井という大きなモダンマンションと喫茶店・居酒屋などが入居する小店舗群が一体となった建物の一角。1階のお店の連なりの中に、2階へ続く階段のあるガラス張りの入り口があります。この空間にはイベントのお知らせ、展示のフライヤーが手作りのディスプレイ箱に掲示されていて、早くもアートスポットらしい雰囲気を演出。階段はカフェのある大きな部屋へとつながっており、これにギャラリー、キッズスペースという二つの空間が連なっています。

取材当日には、手作りのドリンクカウンターのあるカフェでお母さんと子供たちのパーティーが行われていました。子供の声が賑やかに響き渡る一方、隣のギャラリースペースでは、美術大学生による展示が行われていました。ギャラリーでは、〈小金井アートフル・アクション！〉に関係するワークショップやイベントだけではなく、アートフル・アクションがプロデュースする企画展の開催と、市民が表現の可能性を追求する事のできる場の運営を行っています。ギャラリーとは反対側にあるキッズスペースには、漫画家・西島大介さんの壁画が描かれていて、子供たちがその絵に見つめられるように元気に遊んでいました。カフェはイベントのない日も営業していて、お客さんの中からもギャラリーの利用者が出てきてしまいそうなほど、それぞれの空間が共存した雰囲気があります。

この場を運営しているのは、多様な年齢層の小金井市民と、大学が連携し運営しているNPO法人アートフル・アクションです。行政や企業、大学などと連携しながら、市民が縦横に力を発揮することができるような運営をめざしているとのこと。多様な市民がプロジェクトを通じ、新しい価値や創造の楽しみを見出す機会と場づくりを進めています。「行政」対「市民」という構図を生み出してしまう要求型の市民活動のための場所とならないように、市民と市民、市民と行政の力を合わせたプロジェクトを「共同型」の市民活動として推進していくための場になるよう、意識されているそうです。

〈小金井アートフル・アクション！〉では、関わる方が主体的に考え、動けるようになるために、「市民による現代アート入門講座」の企画・運営、シャトー2Fでのギャラリー展示の設営、アーティストとのやり取り、まち中の展示会場のリサーチなどへ参加する機会を提供しています。参加者による、各プログラムの進め方を見守り・手助けしながらも、主体的に動けるような支援をする、人材育成と参加の方法をとっているとの事でした。

事務局の宮下さんの話を聞いていて非常に参考になったお話がありました。シャトー2Fと同じ建物に入居している方が小金井市の長年の課題であるゴミ問題について、提案を求めてきたことが、行政とNPO、大学との新たな協働プロジェクトのきっかけとなり、ゴミの減量メッセージに関したキャラクターのデザインや広報事業に発展。マンション住人の方がNPOを通じて大学の研究室と行政を繋げるきっかけとなりました。

市民が主体的に運営する複数のプロジェクトがシャトー2Fでゆるやかな集いを持ち始め、その繋がりで場を満たす時、また新たなプロジェクトが生まれるのだと思います。

小金井アートスポット シャトー 2F（ニーエフ）
http://chateau2f.com
東京都小金井市本町6-5-3 シャトー小金井 2F
JR中央線武蔵小金井駅南口から徒歩5分

近日開催の〈小金井アートフル・アクション！〉関連展示
talking cafe 2013 アート×学校（まなび）
―2012年小金井アートフルアクション！の実践―
日程：2013年3月14日（木）～17日（日）
会場：小金井市民交流センター マルチパーパス・市民ギャラリー

ライヴハウス音楽と現代美術

石井萌

ライヴハウスで音楽を聴くのが好きだ。数えてみたら、去年は117本のステージに足を運んでいた。

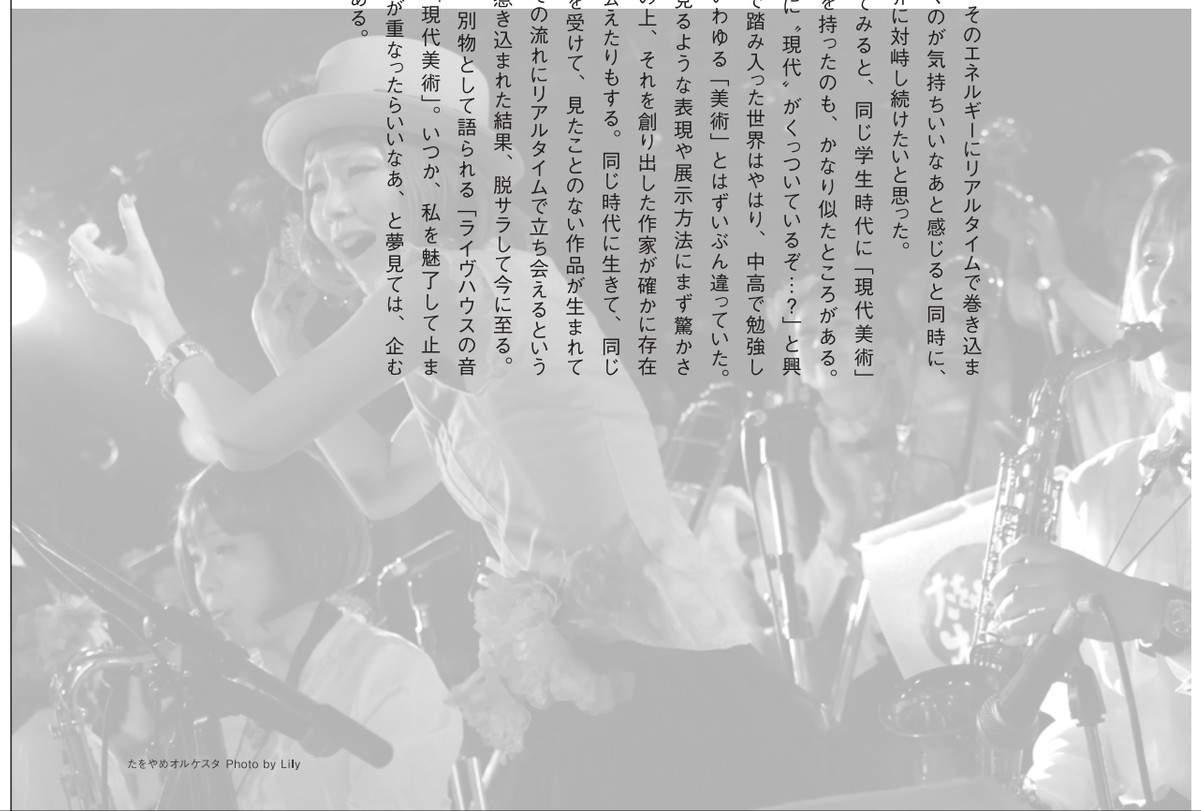
学生時代、好きなアーティストの存在確認をしようと思い立ってライヴに行ったのをきっかけに、すっかりライヴハウスに取り憑かれた。そこで体験した音楽が、テレビやCDで認識していた「音楽」とずいぶん違っていたからだ。

まず、演者が同じ空間に居る。目の前で、その音楽を創った本人が演奏している状況の贅沢さにしびれた。次に、振動。ポータブルプレーヤーで流す音楽は耳で「聴く」もの。ライヴハウスでは、胃のあたりがびりびり震えるのを体感することで、音の正体が「振動」だということを思い出す。

そして、バラエティに富んだパフォーマンス。驚くほど表現の自由度が高いし、もはや何なのかも分からないショーも、山ほど観た。「何系聴くんですか？」と尋ねられたら、便宜上「ジプシー、ビッグバンドジャズ、アイドル音楽」と答えるが、正直ジャンルはよく知らないし、どうでもいい気もする。後ずさりするほどの音圧とか、思わず踊り出してしまうリズムとか、圧倒されるパフォーマンスとか。そのエネルギーにリアルタイムで巻き込まれていくのが気持ちいいなあと感じると同時に、この世界に対峙し続けたいと思った。

考えてみると、同じ学生時代に「現代美術」に興味を持ったのも、かなり似たところがある。「アートに〝現代〟がくっついているぞ…？」と興味本位で踏み入った世界はやはり、中高で勉強してきたいわゆる「美術」とはずいぶん違っていた。初めて見るような表現や展示方法にまず驚かされ、その上、それを創り出した作家が確かに存在して、会えたりもする。同じ時代に生きて、同じ出来事を受けて、見たことのない作品が生まれていく。その流れにリアルタイムで立ち会えるという世界に惹き込まれた結果、脱サラして今に至る。

今は、別物として語られる「ライヴハウスの音楽」と「現代美術」。いつか、私を魅了して止まない二つが重なったらいいなあ、と夢見ては、企む毎日である。



たをやめオルケスタ Photo by Lily

Tokyo Art Research Lab（TARL）とは…

アートプロジェクトにまつわる問題や可能性をすくいあげ分析する、リサーチ型の人材育成プログラムです。アートプロジェクトを持続可能にするシステムの構築を目指します。東京の様々な人・まち・活動をアートで結ぶことで、東京の多様な魅力を地域・市民の参画により創造・発信することを目指す東京文化発信プロジェクト事業「東京アートポイント計画」の一環として実施しています。

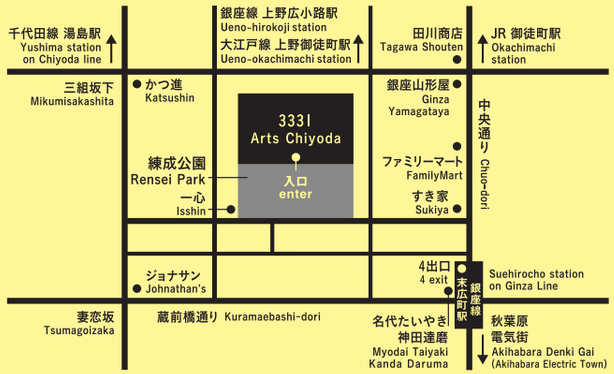
主催：東京都、東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）
事務局：NPO法人アーツイニシアティヴトウキョウ［AIT/エイト］

TARLで展開してきた11の講座

テーマ	講座名称	受講形式
基礎体力をつける	アートプロジェクトの0123	連続
	日本型アートプロジェクトの歴史と現在Ⅱ	連続
	アート社会論Ⅱ	公開
企画力をつける	渋谷アートファクトリー計画 DIWO Lab. Do It With Others！ 新世代ものづくり実験シリーズ	公開
	実践！プロジェクトデザイン	実践
	構造茶話会 プロジェクト構造論	連続
現場力を鍛える	「組織」から考えるアートプロジェクトの可能性	連続（一部公開）
	Creators and Law Creative Projectのための リーガル・デザイン	公開
記録や評価について学ぶ	P+ARCHIVE リアルARTプロジェクト・アーカイビング実践	連続
	「評価」のためのリサーチの設計と実践	実践（一部公開）
「知」と「スキル」をネットワークする	ネットワーキング・ラボ	公開

※講座により、受講スタイルや申し込み方法が異なります。

各講座のレポートや成果物をウェブサイトで公開しています → http://tarl.jp



メイン会場：
東京文化発信プロジェクトROOM302
〒101-0021
東京都千代田区外神田 6-11-14
（3331 Arts Chiyoda 3F）
Tel : 080-3171-9724
Fax : 03-6740-1926
E-mail : info@tarl.jp

アクセス：
東京メトロ銀座線末広町駅より徒歩１分
東京メトロ千代田線湯島駅より徒歩３分
JR 御徒町駅より徒歩７分
JR秋葉原駅より徒歩８分

Researcher's Voice vol.4
発行日：平成25（2013）年3月27日　発行元：Tokyo Art Research Lab 事務局（NPO法人アーツイニシアティヴトウキョウ［AIT/エイト］）　監修：素司・坂本有理・佐藤李青（東京アートポイント計画）
編集：吉川晃司（TARLリサーチャー）、小澤慶介・橋本誠（TARL事務局）　編集補助：高村美世　制作：石井朔・小澤恭子・三木蓮・吉川晃司（TARLリサーチャー）　デザイン：福岡秀隆　印刷：株式会社アイワード

東京文化発信プロジェクト

Researcher's voice vol.4

tarl
TOKYO ART RESEARCH LAB

2020年
オリンピック・
パラリンピックを
日本で！

東京アートポイント計画

tarl アートプロジェクトのしかけかた　01

北澤潤 アーティスト インタビュー

代表作《リビングルーム》などで「日常の中に“もう一つの日常”を創り出す」活動を展開するアーティスト、北澤潤さん。北澤さんは団地、商店街、学校などのコミュニティに入り込み、そこに関わる人たちとの交流によってプロジェクトを展開します。それにより、地域の人や子供、学生を巻き込んで「場」が作られていく様子は「アートプロジェクト」ならではの光景と言えるのではないでしょうか。今回のインタビューでは、前号に引き続き、アートプロジェクトが生まれる背景にアーティストの声を通して迫ってみたいと思います。地域の中に根付いているけれど密着しない、“日常”と“創られた日常”。北澤さんの操る独特な距離感とその理由が、インタビューを通して見えてきました。（石井・吉川）

— コンセプトである“もう一つの日常”という考えについて教えてください

これまで学校、病院、都会、田舎によって自分自身が作られてきました。ざっくり“日常”として括ったときに、そこに身をおく自分の状況を受け身に感じたんですよね。そこで、日常に対して全く新しい関わり方をするために、もう一つそれを創り出してしまおうと思ったのが出発点です。《リビングルーム》ですと3年目になり、地域の人と関わりながらやっているので、今は自分だけでなく、地域・社会にとってのもう一つの日常とは? それを生み出せないか? ということを考えながらプロジェクトを進めています。

— 現場にはどんな人が関わっていますか

基本的にはそこに住んでいる人たち。「何やってるんだろう?」というレベルで興味を持つ人もいれば、「これは絶対何かある!」と主体的に関わってくれる人もいます。スタッフに入ってくれるのは総じてアンテナがあるというか、面白いものが好きな気持ちの強い人たちです。

— プロジェクトの継続についてどのように考えていますか

《リビングルーム》についていえば、実は1ヶ月で終わるはずでした。でも、地域の方から「ようやく馴染んできたのに無くなっちゃうの?」と言われて考えたのが、ちょうど3年前。消えるからこそ「あれは何だったんだろう?」というインパクトを、その謎めいたことを続けながら残していくことを、できないのか? と思って、今は基本的に継続を前提に作っています。

— 最後には、プロジェクトが自身の手を離れることを想定されてますか

そうなるとは思うけれど、手の離れ方、というのもあって。《リビングルーム》だと、人が集まって、物々交換が始まって、といういくつかのポイントがあります。運営の仕組みやノウハウは伝わるけれど、「これから何が起こるんだろう?」という予測不可能さを見捨てて、継続はできるのか?と思うとなかなか手を離せません。最初は主導者で、今は中心から少し離れて時々行くだけの存在になったけれど、それが刺激になっている。だから、立ち位置は変われど手は離れていないんです。でも、今後刺激を与える人が出てきたら、僕の立ち位置はどうなるんだろう? って、それも楽しみです。

— 自分のプロジェクトをこう観て欲しい、という考えはありますか

一つのプロジェクトを離れて全体を俯瞰したときに、“もう一つの日常”を社会生活の中に創っていこう、という当事務所の姿勢が見えてくると思います。プロジェクト単体は地域を相手にしていて、全体は社会が相手。単体では具体的だけど、少し離れると一つ一つは抽象的になって、全体が見えてきます。現場で偶然出会うような人たちに対してと、TARLのような専門性のある場に関わる方に対してとでは基本的なスタンスは異なりますが、たとえ子供でも「何でこんなことしてるの?」と聞かれたら、本気で答えますね。「僕は全国でこういうことがしたいから、今あなたと会っているんだよ」と。

— TARL講座 <「評価」のためのリサーチの設計と実践> に出演いただいた際の感想を聞かせてください

「アートプロジェクトの価値を曖昧にしちゃまずい」と危機意識を持っている人が近くにいるということに驚いたし、嬉しかったです。自分は個人を出発点にして範疇が広がって、その中で説明したり、社会に提示したりする流れの中で少しずつ問題を認識してきました。それが逆に、「社会に対してアートプロジェクトを提示していかなきゃいけない」というところから出発すると、現場がどんな風に見えているのだろうか? と思いました。

— 北澤さんは自身で評価や検証をしている印象を受けます

《リビングルーム》では一つ一つの出来事に一言メモをつけて記録したり、体験したことも日記のように綴っていますが、それは評価のためというよりもプロジェクトを行う上で重要な要素。それ自体も《リビングルーム》の中で公開していて、一部になっています。自己評価として捉えられるアーカイヴを、常にプロジェクトに包含する構造は、絶対作るようにしています。地域の中で一つのプロジェクトがどう動いているかと、社会の中で複数のプロジェクトがどう作用しているかを見ていることは、実は変わらない。そういう意味で個人の活動と社会に提示していくものが僕の中では地続きなんです。

— 色々な視点を持っているのは、個人ではなく“事務所”として動いていることに関連しているのでしょうか

そうですね。複数の変なことが日本で育まれて、「これは誰がやっているんだ?」ってなったときに、「アーティスト」という変わった人ではなく、あたかも社会の一部のような“事務所”がそれをやっているパラサイト感を狙っています。事務所という形で、地域と不自然な距離を作りたい。《リビングルーム》も一見すれば「空き店舗利用」、「多世代交流」の文脈で捉えられるけれど、実際、商店街の空き店舗にズコーンと居間がある。「多世代交流ならカフェでよくない?」と言われそうですが、日常にどれだけ近づいても絶対に密着はしない、ガラス1枚の距離感を創りたいんです。

photo by Yuji Ito

リビングルーム

2010年から始まった、団地や商店街の空き店舗空間にカーペットを敷いて近隣から家具を集め、その名の通り開かれた『居間』を出現させるプロジェクト。家具は、自宅から持ち寄ったものと物々交換することもできる。変わりゆく空間や、訪れる人たちのコミュニケーションを記録していく。

http://www.livingroom.junkitazawa.com

サンセルフホテル（今春開業予定!）

茨城県取手市の団地で、1日だけ出現するホテルを創るプロジェクト。団地の住民もホテルマンとして参加し、来客を出迎える。1日を過ごす電力は、自立型ソーラーワゴンを押しながら団地を散歩して、来客自身の手で蓄電する。その電気でホテルのモチーフである手作りの「太陽」を光らせ、残った電気を部屋で使って夜を過ごすという体験ができる。〈取手アートプロジェクト「アートのある団地」〉の一環。

http://www.sunselfhotel.com

北澤潤｜Jun KITAZAWA
1988年東京生まれ。アーティスト。北澤潤八雲事務所代表／企画も務める。代表作に《リビングルーム》（埼玉、徳島、ネパール）シリーズの他に、都市の港湾部に人工の島を創る《浮島》（新潟）、放課後にもう一つの学校を創る《放課後学校クラブ》（茨城、神奈川）シリーズなどがある。
http://www.junkitazawa.com

ついに11全てのTARL講座が終了しました。
講座のレポートをTARLリサーチャーよりお届けいたします!

ネットワーキング・ラボ

ネットワーキング・ラボは、TARLの各講座とアートプロジェクトの現場をつなぐ講座として月1回開催。リサーチャーがTARL各講座の状況報告を行い、様々なアートプロジェクトの現場で実際に動いている人たちからは、今まさに実施している旬なお話を伺いました。

基本的なプログラム内容は、2つの異なるアートプロジェクトの代表を招いてそれぞれのプロジェクトを紹介いただき、その後リサーチャーなども加わってディスカッションを行うというものでした。参加者からはプロジェクトをやっている渦中の本人たちは忙しく、他のプロジェクトを見に行く余裕も話を聞くきっかけも今までなかったという声がありました。毎回参加者の会話が進み、課題の共有やお互いのいいところを参考に聞いたりと新たな交流が生まれる様子が見受けられました。傍から見ると今までそんな機会がなかったことに驚きましたが、現場と現場をつなぐ役割を果たし、参加者にはプロジェクトの現場の実態をわかりやすく伝えることができたのではないでしょうか。

10月には大巻伸嗣さんを迎えて、アーティストからの視点でアートプロジェクトの現場の話を伺いました。今までの運営側からの話とはまた異なり、美術館のような場とは異なる舞台で作品を制作・発表するにあたっての考えや、制作に取り組むプロセスで生まれる地域との交流の仕方などについて聞くことができました。作品が持つ力はもちろん、子供からおばあちゃんおじいちゃんまで、アーティスト自身が多くの人々をつないでいることを思い知らされ、その役割の大きさ、アートプロジェクトの要としての存在を強く感じさせられました。

そんな現場の話を聞いているうちに、ついに現場に行ってしまった12月の特別企画。《Y時のはなし・イン・児童館》の公演を参加者とゲストの前回愛美さんで一緒に見に行き、公演後にディスカッションを行いました。同じ作品を同じ時間に鑑賞する。でも見え方はそれぞれ。現場ですぐにそれぞれの意見を交換し、話し合うことで会話も非常に弾み、捉え方の違いを体感しました。

そして最終回。各講座のコーディネーターの方々が集合し、それぞれの取り組みから見出せたもの、実践の現場との関係について、また現場に必要とされている人材とはなにかについて話し合いました。改めて一連の講座を振返ると、本当に方向性、展開の異なる各々の講座がありました。講師の方はご自身の方法で講座を受講生と楽しみながら勉強を進めてきたようです。現場を持つ講師の方にとっては、講座をやってみて、現場でしか伝えられないこと、講座として必要なことの両方があり、その相互関係をうまく生かせる場として、TARL講座の可能性を示唆していました。

TARL講座の中での役割として、知、人、現場のネットワーク化を試み、小さいながらもこれらの関係をつなげられたように思います。点と点を結ぶにはやはり誰かの手が必要。様々な交流は、他に目を向けるきっかけや、それぞれを高め合うためにも大切な場になりました。今後もひとつの出会いがいくつにも膨らんで行くことを期待しながら、これからの行く末を見続けていきたいと思います。（小澤恭子）

期間：2012年7月～2013年2月　各月1回　全8回
コーディネーター：小澤慶介（NPO法人アーツイニシアティヴトウキョウ［AIT/エイト］）、橋本誠（アートプロデューサー）、TARLリサーチャー
ゲスト：東京アートポイント計画事業関係者、大巻伸嗣（アーティスト）、前田愛実（演劇ライター）、小林晴夫（blanClassディレクター／アーティスト）、森田浩彰（アーティスト）、宮崎晃吉（建築家／HAGISO代表）

アート社会論Ⅱ

「従来、“文化”として捉えられてきたアートが社会の方へ向かい、潜在力を発揮しています」（港さん）。作品や取り組みとして、アートに携わる人たちは社会に対しどのように反応・影響しているのでしょうか。本講座ではゲストと共に、社会変動とアートの関係性を改めて見つめ、私たちを取り巻く現代について考えました。

初回のゲストは、福島県いわき市出身のアーティスト吉田重信さん。現在もいわき市を拠点に光や虹をテーマに作品づくりを行っています。紹介された作品の中でも印象的だったのは、子供の靴800足を敷き詰めた《心ノ虹》（2010年、大阪府）、生きた菊の花1000本が床から生え、ギャラリーへ踏み入ることができない《臨在の海》（2011年、京都府）。どちらも3.11前に制作（《臨在の海》はタイトルのみ震災後に付けた）したもので、制作中は「（それを創ったのが）どうしてなのか、自分でも分からなかった」作品たちだそうです。しかし、写真で見る2つの作品は、震災での出来事を強烈に連想させるものでした。

作品制作のすぐ後に3.11が起きた今回のケースは偶然ではあれど、結果的に鑑賞者が自然に作品と「ある出来事」を結びつけることができたのは、共通認識としての不安感や危機感があったからだと言えるのではないでしょうか。第1回は、社会に向かうアートだけでなく、鑑賞者側の変化も感じられる講義となりました。

第2回には小池博史さん、最終回には岡部昌生さんをゲストにお迎えし、短い時間ではありましたが、色んな角度から「現在」を眺められた講座でした。（石井）

期間：2013年1月～2月　不定期　19:00～21:00　全3回
コーディネーター：港千尋（写真家、著述家）
ゲスト：吉田重信（現代美術家）、小池博史（演出家）、岡部昌生（美術家）

「評価」のための リサーチの設計と実践

多様化するアートプロジェクトを前に、「評価」はどのように寄り添う事ができるのでしょうか。数字で表される最終的な動員数や売上は、確かに重要な評価材料と言えるでしょう。しかし一方では、それに至るまでのプロセスや、組織の中で変容していく関係性そのものを価値として重要視する動きも見られます。講座では毎回、様々な現場で活動するディレクターやアーティストをゲストに迎え、記録・調査・検証をいかに戦略的に使いこなすことができるかを考え、議論してきました。

例えば第3回ゲストの石幡愛さんは、運営側が自分たちの目標達成度を計るリサーチを「実践に対する評価」、関係者へのヒアリング等から、現場での具体的なエピソードをふりかえり、対話者としてその価値を引き出す方法を「実践としての評価」と表現し、「何を」評価するのかという根本的な問いと向き合う回となりました。また、毎回話題となったのは記録について。イベント後の情報収集だけでなく、記録と評価そのものをプロジェクト化したrecip（第1回）や、プロジェクト内で参加者が主体的に記録をとる仕組みを取り入れた北澤潤さん（第4回）の活動は、評価を「外からやってくるもの」ではなく積極的に「するもの」として捉えています。

検証を通して新たに見つけられた価値や課題をそのままにせず、繰り返し実践の場に持ち込む事が、評価の本質的な役割と言えるかもしれません。（三木）

期間：2012年7月～2013年2月　不定期　全5回
コーディネーター：佐藤李青（東京アートポイント計画 プログラムオフィサー）
ゲスト：吉澤弥生、辻並麻由（NPO法人地域文化に関する情報とプロジェクト[recip]）、臼井隆志（アーティスト・イン・児童館）、石幡愛（NPO法人クリエイティブサポートレッツ／東京大学大学院教育学研究科）、北澤潤（現代美術家／北澤潤八雲事務所代表）、大澤寅雄（ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室／文化生態観察）

リサーチャーたちのまなざし

TARLの各講座と共に並走してきたTARLリサーチャーが、数々の講座の中から選ぶベスト講座とともに、
1年の活動を振り返った編集後記ならぬ「TARL後記」をご紹介します。

三木茜

〈ネットワーキング・ラボ〉最終回の講座で、改めて各講座のカラーの濃さに気が付きました。アーティストが運営に関わるプロジェクトや、地域振興型のイベントがあちこちで展開し、注目を集めるようになった一方、アートプロジェクトそのものについて考えたり、すぐには解決できない課題を議論する場はなかなか無かったように思います。だからこそ、一方的に知識やスキルを学ぶだけでなく、お互いの好奇心をシェアする場として講座が温まっていく。なんとなくアートプロジェクトに興味を持った人、表現者として現場を盛り上げていきたい人、これから同じベクトルを持った仲間と動き出そうとしている人など、本当に様々な人との貴重な出会いの場でした。

石井萌

東京の中で、こんなにも沢山のことが起きていたのか！と、目から鱗が落ちて、拾う間も無く1年間が終わろうとしています。担当講座の運営やプロジェクトの取材などを通し、様々な切り口でアートプロジェクトに触れる機会があるのが、TARLの最大の魅力だと思います。「どうしてアートでやらねばならないのか？」、頭でぐるぐると考えるよりも、現場に足を運んでみると腑に落ちることが沢山あるのだということを、TARLに関わって実感しました。会社員生活から一転、初めて踏み入る世界だったので、学ぶことばかり。これからも勉強を続けつつ、私の思う「あるといいな」を実現できるよう、精進します。お世話になった皆様、改めて、この1年間本当にありがとうございました。

小澤恭子

私が担当した〈「組織」から考えるアートプロジェクトの可能性〉〈構造茶話会〉〈アートプロジェクトの0123〉は、どれも全く異なる様相で、こんなにもアートプロジェクトについて考える切り口があるのかと思いました。比べることは出来ませんが、わかったのは、どのプロジェクトも決まったマニュアルは何ひとつないこと！ でも現場を持つ講師の方々の話にはたくさんのヒントが散りばめられていて、どれをピックアップして今の自分に活用していくか。様々な背景や目的を持つ受講生の誰しもが、何かを持ち帰ることが出来たと思います。そして結論！ 授業は盛り沢山でしたが、そんな自分に響いたたったひとつのことを実践すること。それがプロジェクト共通のマニュアルかも知れません。

吉川晃司

2011年の〈墨東まち見世〉に関わり、それから他の現場のことが知りたくなって、大阪や岡山、広島などで様々なプロジェクトを行う人たちの話を聞きに行った。TARLでは、専門的な知識を学びつつ、東京の数々の現場の話も聞くことができ、自分が関わっているプロジェクトを相対化することができてきたように思う。今後はここで得た知識や、知り合うことのできた人たちを、再び現場につなげるような活動をしたいと思っている。僕が可能性を感じているのは「アート」という括りを越えたアートプロジェクトだ。町の中の多種多様な活動が自然と「アートプロジェクト」的な性質を得てくることで地域に何が起こるのか、見守って行きたい。

リサーチャーが選ぶベスト講座

Creators and Law：第5・6回
現役弁護士のレクチャーで著作権などの知的財産について学び、ゲストの福嶋麻衣子さんには、ネット・レーベルなどそれらにまつわる事例を紹介いただきました。クリエイティブな活動と現代社会との摩擦の中で起こる課題を捉えた回でした。（三木）

日本型アートプロジェクトの歴史と現在Ⅱ：第6回
ゲストのきむらとしろうじんじんさんが、被災地で〈野点in大槌〉を行うにあたっての葛藤や、現地で見た光景など、貴重なお話を伺うことができました。インタビュー映像でスタッフとして活躍した現地の方々の言葉が聞けたことも印象的でした。（石川）

アートプロジェクトの0123：第1回イントロダクション
コーディネーターの小川希さんによる、誰から教わることもなく、ゼロから全てを自分たちの手でつくり上げた展覧会の話から自分のスペースを持つまでに至るリアルな話は、真っ直ぐで信頼できる、どんな知識よりも価値あるものでした。（小澤）

「組織」から考えるアートプロジェクトの可能性：第4回
演出家・花井裕一郎さんの関わってきた長野県小布施町にある〈まちとしょテラソ〉という図書館のお話。今までの図書館のイメージを一新する多彩なイベントが企画され、独自の手法で運営されている様を聞くことができました。（吉川）

図書館で素潜り

三木茜

広尾駅から徒歩5分、起伏に富んだ広大な有栖川宮記念公園の一角にある都立中央図書館は都内最大級の蔵書を誇るそうだ。平日でも勉強か仕事か、多くの利用者が訪れる場所なのだが、私にとっては新しい情報を詰め込んで整理しきれなくなった思考の奥地をひとり旅する空間でもある。

多くの人が図書館をどのように使っているかは知らないが、私の場合、まるで素潜りのようだと思う。

ある程度のキーワードは蔵書検索で絞り、あとはリストを頼りに手当たり次第手にしてみる。タイトル、装丁、ざっと目を通して数冊選ぶ。席に着いていざ読んでみるといまいち目当ての内容ではない。同じ場所に戻し、別の数冊を手に取って席に戻る。芸術関連のコーナーだけを行き来して、この作業の繰り返しに、半日からまる一日費やす事もある。ある深さまでは潜れるのだがその先が本当に少しずつしか進まず、結局収穫が無い事もしばしば。

ウェブサイトにありがちな「他の人はコレもチェックしています！」といった気の利いたサービスに慣れると、するすると流されてただ膨大な情報の渦に飲み込まれてしまう。図書館で大事な能力は勘だと思う。

しぶとく一つの情報を追う時間はなかなかもどかしい。やみくもに本を漁っても案外役立つ情報が得られないなんていう経験は誰しもあるのではないだろうか。

素潜りに装備は要らないが勘が要るようだ。

一方で図書館は思いがけず新鮮な出会いももたらしてくれる。例えば過去に観た作品について調べるうちに、その作品を前にした時の自分の感情が鮮明に蘇る瞬間がある。その記憶と別の解釈や事実が交わると、全く違った印象で再構築されるのだ。正解かどうかではなく、情報に対する勘というのは本という媒介がとてもしっくりくるように思える。

無事浮上した後は、やっと雲が晴れたような気持ちになるのだが、これが外に出るととっぷり陽が暮れている日も少なくない。